

氏名	BUJAK Piotr Lukasz (ブヤク ピオトル ルーカス)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第90号		
学位授与日	令和4年3月15日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	STOPGAP HAIKU: SUBVERSION & ARTIVISM IN VISUAL ART PRAXIS IN THE CONTEXT OF POLISH AND JAPANESE CONTEMPORARY CULTURE		
審査委員	主査	教授	久保田 晃弘
	副査	教授	中村 寛
	副査	東京藝術大学 大学院国際芸術創造研究科 教授	毛利 嘉孝

内容の要旨

本論文は、人類学、コミュニケーション、メディア、心理学、カルチュラル・スタディーズ、歴史、人文地理学にまたがる問題が、日本の現代視覚芸術にどのように存在しているのか、そしてどのように知識の余剰を生み出すことに貢献できるのかを、ポーランドと比較して研究するものです。

核となる枠組みは、異なる文化的・政治的環境で生まれ、社会的・政治的問題を批判的理論の角度から議論する可能性を示す、現代のエンゲイジド・アートのプロジェクトやアプローチを、実践ベースで分析することです。

その目的は、ポーランドと日本の現代オーディオビジュアル文化において、社会政治的問題がどのように扱われているかを、実験的かつ学際的なアートの実践に基づいて比較研究することです。さらに実験的人類学研究に基づいた、アート実践の視覚言語を介して現代の問題を議論するという、(ユニークな)方法論の妥当性と、社会科学への応用可能性を証明することにありました。

このプロジェクトの主な方向性は、次のような歴史によって定められました。

1989年に冷戦が終わり、資本主義が始まってから、ポーランドの社会、文化、経済のあり方は急速に変化してきました。日本では、1989年は平成元年にあたり、日経平均株価が史上最高値を記録した年でもありました。しかし1990年になると、10年にも及ぶ不況という経済的な大混乱に見舞われました。一方、2001年9月11日からのテロとの戦い、2008年の金融危機を経て、世界の政治・経済は大きく変化しました。それに続く芸術プロジェクトは、現代の人間科学や社会科学にとって最も興味深く、影響力のあるものであることがわかりました。

本研究における、異文化間での実験的なミクストメディアの共同作業や、個人のアート実験のプロセスを通じて、時間軸に基づくメディア、ファウンドオブジェクト、創造的なリサイクル、アッサンブラージュ、公共の場での介入（仮想および現実の世界）やワークショップを活用し、グローバル化した世界秩序の支配的な新自由主義のパラダイムを覆す、新たな物語を展開することを意図しています。

主な参考文献：

- ミニマリズム
- アルテ・ポーヴェラおよびプリミティヴィズム（特にサイバー・アートの領域において）
- コンセプチュアリズム
- 構造主義
- アプロプリエーション・アート
- ポスト・インターネット・アート
- ポスト・アーティスティック・アートの実践
- ローブロー・アート → ある程度まで、特にアートマーケットやいわゆる「リアル」なアートの世界に対してのみ
- 文化的アクティヴィズム（プロテスト・アート、レジスタンス・アート、アートアクティヴィズム）
- リレーショナルアート、レスポンス
- メールアート
- ソッツ・アート
- コンフェッショナル・アート

テーマ：

本プロジェクトのフィールドワーク、リサーチ、ビジュアルコンポーネントでは、以下のようなテーマ群に取り組んでいます。

- ネットワーク化されたコミュニティとそのアイデンティティへの影響
- 監視と（→公共の安全）の時代におけるプライバシーと安全性
- 共感、責任、倫理観に対するマスメディアの影響
- 情報共有の代替手段
- 快適さと商品化
- 新自由主義的現実における消費主義（主に人為的に刺激された過剰消費の弊害）
- 工業化と技術の進歩が社会と環境に与える影響
- 軍国主義
- 市民的不服従、社会工学、社会統制
- 排他性、ポピュリズムと権威、プライバシー対公共の安全保障、オープンソース・データベースなど
- 社会経済的、政治的、法的、文化的、制度的な抑圧
- 労働文化と労働倫理
- ソフトパワー
- 権力、権威、ヒエラルキー
- 社会的規範

方法論的枠組み：

実践に基づく研究のコア・ストラテジーは以下の通りです。

- 低予算
- DIY（ドゥ・イット・ユアセルフ）
- クイック&ダーティー
- ヒット&ラン

本論文は大きく2つの部分に分かれていて、全体で4つの章と、エピローグと補遺で構成されています。

第1部は2章で構成されており、方法論的選択、用語、背景など、作品のより理論的な部分を扱っています。第2部は、同じく2つの章で構成されており、実践的な分析に充てられています。フィールドリサーチや、何より博士課程の研究期間中に考え出された、著者の創造的な成果である論文の主要なテーマを取り上げています。エピローグでは、本研究のプロセス全体を自然な形でまとめ、補遺では、学芸員の声明や引用文などの日本語の文章や参考文献を参照できます。論文は謝辞と参考文献で締めくくられます。

This thesis studies how issues located between anthropology, communication, media, psychology, cultural studies, history and human geography are present in modern Japanese visual arts, how it compares to Poland and how it can contribute to generate a surplus of knowledge.

Core framework was a practice-based analysis of contemporary engaged art projects and approaches, which originated in such different cultural and political habitats, and which display a potential to discuss sociopolitical problems from the angle of critical theory.

The goal was to prove validity and perspective potential use for social sciences of the (unique) methodology of discussing contemporary issues via the visual language of experimental anthropology and research based art practice, naming on own experimental and interdisciplinary art practice-based comparative study of the ways socio-political issues are being addressed in the contemporary audiovisual culture in Poland and in Japan.

The main direction for the project was defined by the following narrative:

From the end of the cold war and inception of capitalism in 1989, the nature of social, cultural and economic Polish landscape has been changing rapidly. In Japan 1989 was the first year of Heisei era as well as the all-time peak of the Nikkei 225 stock market average. However, in 1990 this country faced the great economic turmoil resulting in a 10-years long recession. On the other hand global politics and economy, have dramatically reshaped after the introduction of war on terrorism declared after 11 September 2001 and after the eruption of the most recent financial crisis in 2008. Artistic projects that followed, turned out to be the most interesting and influential for modern human and social sciences.

Basing on this study, through the process of cross-cultural, experimental mixed-media collaborative and individual art experiments, utilizing time-based media, found objects, creative recycling, assemblages, public interventions (in both virtual and real world) or workshops, the intention was to develop new narratives undermining the dominant, neoliberal paradigm of the globalized world order.

MAIN GENERAL REFERENCES:

- Minimalism
- Arte Povera and Primitivism (especially in the subdomain of cyber-arts)
- Conceptualism
- Structuralism
- Appropriation Art
- Post-Internet Art
- Post-artistic art practice
- Lowbrow Art → only to some degree, especially in reference to the art-market and the so-called “real” art- world
- Cultural Activism (Protest Art, Resistance Art, Art Activism)
- Relational Art and Responsiveness
- Mail Art
- Sots Art
- Confessional Art

THEMES:

Field work, research and visual component of the project are addressing the following theme clusters:

- networked communities and their impact on identity
- privacy and safety in an era of surveillance and (→public security)
- influence of mass-media on empathy, responsibility and sense of ethic
- alternative methods of information sharing
- comfort and commodification
- consumerism in neoliberal reality (mostly the drawbacks of artificially stimulated overconsumption)
- effect of industrialization and technological progress on society and environment
- militarism
- civil disobedience, social engineering, social control
- exclusiveness, populism and authority; privacy vs. public security; open-source databases etc.
- socioeconomic, political, legal, cultural, and institutional oppression
- labor culture and work ethics
- soft power
- power, authority and hierarchy
- social norms

METHODOLOGICAL FRAMEWORK

Core Strategies of the practice based research were as follows:

- Low Budget

- ・ DIY (Do It Yourself)
- ・ Quick and Dirty
- ・ Hit & Run

The thesis is divided into two main parts making four chapters in total, as well as an epilogue and the supplement.

First part, comprised of two chapters is addressing more theoretical component of the works such as methodological choices, terminology, background etc.. Second part is also comprising two chapters is dedicated to the practical analysis and covers field research and most of all—the main vessel of the thesis which is own creative output conceived throughout the duration of the PhD study program. Epilogue in a natural way sums up the whole process, while the supplement provides the read with the Japanese language writings and references, such as curatorial statements, quotations, and alike. The thesis ends up with acknowledgments and bibliography.

審査結果の要旨

著者の Piotr Lukasz Bujak (ピオトル ルーカス ブヤク) は、ポーランド出身のアーティストである。ヤン・マテイコ美術アカデミー (クラクフ、ポーランド) とサンフランシスコ・アート・インスティテュートを卒業後、2019年に多摩美術大学大学院博士後期課程に入学。東京とポーランドを往復しながら、研究創作活動を行ってきた。2018年にはポーランドのヴロツワフ現代美術館で「RED IS BAD」という個展を開催し、2019年に日本とポーランドの交樹立100周年を記念して開催された「セレブレーション—日本ポーランド現代美術展—」では、京都の二条城で映像作品《花火》を展示した。また、2021年に出版された京都市立芸術大学の加須屋明子教授の近著『現代美術の場としてのポーランド: カントルからの継承と変容』(創元社)にも作品が掲載されている。

著者の基本的な制作研究のスタンスは、ポーランドと日本を軸とする学際的・異文化的研究の枠組みの中で、本論文で詳説されているようなポスト・アーティストックな芸術実践(アクティヴィズム)としての研究を行うことにある。ポーランド人である著者が、日本という不慣れた土地で、今日の政治や社会、経済に対して批判的な異論を表明することがどのようなパフォーマンスティヴィティを持ち得るか、という問題設定は、指導教員にとっても非常に興味深いものであった。実践に基づく研究と、研究に基づく実践が、フィールドワークの現場で融合し、両者は一旦見分けがつかないものになる。それはある種の実験人類学的な、あるいはラディカル・エスノグラフィックな参与観察の形をとりながら、そこで生じた社会的な、あるいは政治的な(つまりは人間的な)出来事をフィルタリングし、作品や展示としてレンダリングしていく。それは著者のミニマルな(しかしコンセプチュアリズムやミニマル・アートにおけるブルジョアジーを脱神話化して嘲笑する)美学とも相まって、ファミリアな日常の物語を異化するエージェンシーを獲得する。

博士課程入学当初から著者が掲げていた5つの簡潔なモットー「Low Budget」「Quick and Dirty」「DIY」「Hit & Run」「ARTivism」は、非常に興味深い。価格は機能のひとつである。つまり低価格(Low Budget)であることは、高価なものよりも、ある意味では高機能である。なぜなら、費用がかかるものは往々にして失敗が許されず、それはプロジェクト自体を保守的な方向に向かわせる。低価格なものとは、(権威的な伝統的画材ではなく)大量生産される工

業製品や日常物、あるいはありふれた自然物であり、それらを用いて迅速かつ大雑把 (Quick and Dirty) につくりあげること、素早く実行し、撤去すること (Hit & Run) ができる。そこに通底している方法が、自分自身の手でつくりあげること (DIY) であり、それは高価 (ハイ・コスト) な熟練 (ハイ・テック) という定型化に陥ることなく、低価格なローテックにあえて留まることで、初学者の衝動を持ち続けると同時に、封建的徒弟制度による熟練至上主義と、共有が提供に変容したポスト消費社会に対する異議申し立てにもなる。最後の ARTivism = ART (芸術) + activism (活動主義) は、それぞれが密接に関連しているこれら 4 つの項目を包括する実践的思想であり、あえて付け加えるならば、それを芸術的ハッカー精神に根ざしたアート・ハクティヴィズム (art hacktivism) ということもできるだろう。

論文の第 1 章と第 2 章では、まず、こうした著者の基本的な理念と思想 (コンセプト)、そして本研究の目的 (ゴール) が、極めて明快かつシンプルに謳われる。著者はイタリアの「アルテ・ポーヴェラ」、「フルクサス」、アルトーの「残酷演劇」、ディック・ヒギンズの「インターメディア」、マックス・ホルクハイマーの「批判理論」、リンダ・キャンディーの「実践に基づく研究」といった大きな歴史を引用しながら、ここ 30 年の、日本においては平成時代以降の、全世界的な不況、テロ、金融危機、大災害といった不安定な社会状況後のアートの在り方=生き方を模索する。

第 3 章は、著者が 2017 年に来日した後に行われた、フィールドワーク (実践的思考) の記録である。そこでとりあげられた笹岡由梨子、持田敦子、江上賢一郎、百瀬文といった日本人アーティストは、著者の活動を考えれば、確かに納得できるものでありながら、パーソナルな関係の来歴を含むその語り口は、「なるほど、そういう見方があるのか」という意外性や新奇性を有している。同時に、ここで述べられている、ポーランドと日本のアートシーンの全体的な特徴に関するコメントも、非常に洞察的で納得のできるものであり、本論文の重要な成果のひとつであるといえるだろう。本章の最後には、関連のある日本のキュレーター、研究者、作家、施設の長大なリストがあり、著者のフィールドワークの多様性と活動量が、そこから垣間見ることができる。

こうした他者に対する、別の眼差しと、自身に対する、他者の眼差しが交錯するところに著者の作品群があり、それらは第 4 章にまとめられている。作品の数が多いため、ここではそれをひとつひとつ述べるスペースはないが、前述の 5 つのモットーに根ざしながらも、ジャンクや折衷、あるいは雑種のように感じられないのは、ひとつひとつの作品のテーマを明確に設定し、それがもっとも強く、しかし詩的に浮かび上がってくるように、不要なものを徹底的に除去していく著者の、それこそ (いささか陳腐ではあるが) 美的あるいは詩的というしかない感覚と、(いささか高踏ではあるが) 知的な分析と判断の賜物であるといえる。そうした実践に根ざした感性と悟性の洗練こそが、著者の活動を「ポスト・アーティストック」と形容し得る大きな理由となっている。

論文の冒頭に、日本とポーランドのユニークな、しかしあまり知られざる関係が語られている。1990 年に民主的に選出された初のポーランド大統領となり、ノーベル平和賞を受賞したワレサ議長 (レフ・ヴァウエンサ) は、1980 年 8 月のグダニスク造船所における労働者ストライキの際、ジャーナリストからポーランド将来について聞かれた際にこう答えたそうだ。「我々はポーランドに第二の日本を作るつもりである」。彼が組織的な社会、そして非暴力の象徴として取り上げた日本は、その後 40 年を経て、一体どのように変化していったのか。ポーランドと日本という、地理的にも文化的にも遠いと思う人が多い両国の関係は、実は「絶滅の危機に瀕した同質性」というメカニズムに基づいた社会的統制を国家的に維持しようとし、それを

許容しているという点で、驚くべき類似性を示している。

本研究の最初のタイトルは、(Socialists に発音の似た)「Social-Easts」という、西欧の資本主義社会や文化が、ポーランドと日本の両方に「東」という言葉でラベルを貼り、その後東洋化してきたことを示す、著者自身の政治的な所属を直接的に表現する造語だった。ポーランドと日本の現代の視聴覚文化の中で、社会的・政治的問題がどのように扱われているかを、実験的・学際的なアート・プラクティスに基づいて比較研究することを目的とした本論文は、著者の精力的な創作活動と、日本とポーランドを何度も行き来した広範なフィールドワーク、そして多様な分野の知見を接続した学際的な理論的スタディによって、テクノロジーが覆い尽くした現代社会の状況を、テクノロジーを用いずに鋭く表現した。そこから、グローバル化した世界秩序の支配的な新自由主義のパラダイムを覆す、新たなマイクロ・ナラティブを生成することに成功し、論文冒頭に掲げられたレフ・トロツキーのことば「芸術は鏡ではなく、ハンマーである」を自ら体現し得た。よって審査委員の総意として、本論文を学位を授与するに相当するものと認める。

(久保田 晃弘)